

◆急に寒くなってきた。空気の質がガラッと変わったようだ。肌の中まで冷たさが浸みこんでくるようだ。天気予報も、最低気温が－4度、－5度あるいは－3度と、毎日のように氷点下を示している。体感温度はもっと低くなる。



12月14日の朝、とうとう雪が降り始めた。寒いわけだ。私の冬ものは、まだ dogana(税関)から配送されてこない。はたして FAX した書類は正確に届いているのだろうか。もうしばらく待つしかないと思いながら、ポルティコの下を歩いていると、いつも目に入る洋服店のショウ・ウインドーに並んでいる冬ものが、普段よりも輝いて見える。このお店の服は英国風の作りで、上等の生地をしっかりと縫い上げているようだ。ゆえに値段も高い。私などとても手を出せるような価格ではない。暖かそうな冬物を見ながら、早く荷物が届かないかと思いつつ、襟巻をもう一度隙間ができないように巻きなおした。



いつも紳士達が立ち止まって、なかの陳列物を吟味している。

◆12月12日(土曜日)と13日(日曜日)に、ミラノでお世話になった Cesare 師範の AISE(Associazione Italiana Sport Educazione/イタリアスポーツ教育協会・仮訳)が主催する、新年2月に開催される柔道の紅白試合出場選手選考会がボローニャの Pino 師範の道場で開催された。私も何もお手伝いできないが、挨拶がてら試合の見学に行った。20歳以下の男女約50名の judoista(柔道選手)たちが熱戦を繰り広げていた。なかなか壮観であり、選手一人ひとりの個性が戦い方に表れている。各人の長所と短所も如実に表れているが、柔道の専門家でない私は

一切口を出さないようにしている。知り合いの選手も多数いたが、アドバイスらしきことは一切しないようにした。それは彼らの指導者の役割だからだ。



試合後は、

師範達による講習会も行われた。正座のできない者もいるが仕方がない、ここはイタリアなのだ。

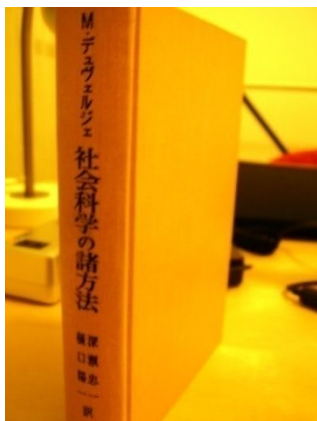
12日の夕食と13日の昼食は、彼らと一緒にご相伴に預かってしまった。開催場所の道場関係者が、食事等の用意などをするので、私も門外漢ながら、チーズを角切りにしたり、ペットボトルの水を配布したり、ごみを処分したり、一応邪魔にならない程度にお手伝いしていた。

そこへ大師範でありこの協会のトップの Cesare 師範が来て、来年の夏の合宿で、古流柔術や棒術を教えてほしいと依頼してきた。ところが、彼のイタリア語が私にはよく分からない。反対に私のイタリア語も彼にはよく分からないらしい。そこで一人仲介者＝通訳をはさんで、双方のイタリア語を双方が分かるイタリア語に翻訳してもらいながら話を続けた。ちょっと不思議だが、これは言語表現上の論理構成(話す事項の順序、使用する単語および説明の挿入個所などの相違)の違いに原因があると思う。このようなことはイタリア語学校でも、よく経験しているのだ。仲介者は、私とよく話をする人だったので、外国人、特に私のような日本人に対してイタリア語を話すときのコツが分かっているようだ。これは他の柔道仲間にも言えることだが、イタリア人同士のイタリア語と外国人向けのイタリア語を使い分ける必要があるということを、彼らも経験したと思う。本来は両方とも共通していればよいのだが、仕方ないだろう。私も日本の職場で外国人留学生等と話すときは、通常の日本語を外国人用の日本語に変換しながら話すことが多い。でもそうすることで、彼らも明確に聞き取れ、理解できるし、こちらの意思も明確に伝わるので、良いことなのだろう。そのうち慣れてくれば、彼らも日本人日本語を十分に理解できるようになる。時間の問題である。ただ私の場合は、時間がもうないのだ。

さて、大師範の依頼だが、もちろん日本にいる私の師範や仲間たちと一緒にできないので、相談してみるということにしておいたが、どうして古流などに興味を持つのか。他の関係者の話によると、柔道がイタリアに定着した後、オリンピック種目になったことも手伝って、この国の柔道界が武道からスポーツ柔道へ移行してしまったそう。選手たちは試合に勝つためにトレーニングをするだけになってしまって、本来の嘉納治五郎師範の理念や哲学、思想などはまったく抜け落ちてしまったそうである。その傾向に異を唱えて、むしろ武道としての柔道の復活と、嘉納師範のように柔道を媒介にした教育活動に重点を置いた柔道活動を展開し始めたのが、Cesare 師範ということなのだ。この AISE もそのために設立されたということ。そこで彼らにとって一番の空白は、古流部分である。嘉納師範も最初は天神真楊流を学び、次に起倒流を学ぶ

ことで、今の柔道(講道館流柔術)を創り上げた故に、やはりその源流を知りたいという思いが強い。技の成り立ちなどの研究にも役立つとのことだ。これは断るわけにはいかないが、果たしてどうしたらよいのだろう。本当に、経験も知識も、さらに社会生活で育まれた経験に基づく直観的理解も全く無い人たちに相手に、何をどのように教えればよいのか。過日も古流柔術と棒術を少し教えたが、想像以上に、全くできないのである。ちょっと思案しなければならない。でも異国の地で、このような興味を持つ人たちに会えて、よかったと思う。今の勤め先には定年があり、その後はなかなか研究というわけにはいかなくなると思うが、この分野は身体が動く限り続けられるのである(もちろん研究も方も頭と身体が元気な限り続けられるが)。むしろこれからの残りの人生の大半は、こちらの方の活動に費やされるのではないかと、とも思ってしまう。今から思うと、最初に健康のために柔道場を探したとき、ボローニャ市内の数多い柔道場の中で、他の柔道場にはどうやっても接触ができなかったが、いまの Pino 道場には何の問題もなくまさに自然に入門できたということも、何かの強い縁で結ばれていたのかもしれない、と勝手に思ってしまうのだ。とにかく一思案しなければ。

◆いま M.デュヴェルジェ『社会科学の諸方法』深瀬忠一・樋口陽一訳(勁草書房、1968 年)を読んでいる。これは 1964 年に出版された Maurice Duverger, *Méthodes des sciences sociales* の翻訳である。なぜいまさらこのような本を読むのかというと、遅々として進まない私の研究であっても、日々の忙しさの合間を縫って少しずつ考えていると、結構大規模な研究になりそうな予感がしてきた。定年までかかっても大成するかどうか分からない。そして今まで書いてきた自分の論文を思い起こして、何が論述上足りないのか、どうしてもっと説得力が出るのか、などと思うようになり、再確認を含めてもう一度、この手のものを読み直そうと思ったのである。またそうすることで、帰国後の大学院生たちの指導にも役立つのではないかと、小さな打算も働いてのことだ。



古本で購入したもの。上々の品である。

いわゆる方法論の書籍は、日本にはあまりないような気がする。大学院生だった時、このような本を探して色々読んでみたが、どうもパツとしない。というかその当時の私の能力では理解できなかったのかもしれない。でも、特に規範科学である法学と、その他の社会科学との方法論上の関連について言及されたものを見つけることは出来なかった。もちろんケルゼンの純粹法学なども独学してみたが、その他の分野との関連で法学研究を明瞭に記述したものはなかった気



がする。『法と現象学』などもあるが、なかなか理解できない。またそれを使って具体的に記述された法学論文を見つけることが出来なかった。そうこうするまま現在に至ってしまったが、色々な学会や研究会に出て、若手からベテランまでの報告を聞くに及んで、どうしてもこの方法論という部分がはっきりと掴めないでいた。各報告からも、それが読み取れないのである。私の能力不足・勉強不足もあろうが、結局は良く分からない。ゆえに日本の報告は議論として展開しないのではないだろうか、とも思ってしまう。特に規範科学と云われている法学においては、最終的には価値観にも関連するために、結局は「あなたの世界観、私の人生観」でしょう、ということが終わってしまっているような気がするのだ。ことの優劣は、弟子や仲間の数で決まることもあろう。でも、この部分を自分なりにでも明瞭にしなければ、結局は実務家たちに研究者が負けてしまうことは目に見えている。それでは、研究者・学者として生きることを世間に認められたものとして、失格ではないだろうか。などと大それた、傲慢不遜なことを考えながら、何となく抱いている自分の考えを確かめる意味もあって、この本を読み始めたのだ。さて、その結果は、どうなる事やら。なお、この手の書籍を探しに書店に行き、有らん限りの言葉を尽くして一と言っても、すぐに尽きてしまったのだが一色々と聞いてみたが、どうもこの種の書籍はないようなのだ。manuale か、と聞かれたが、metodo の本だと言っても、店員にはよく分からなかったようだ。大学図書館のようなところでない見つからないのかもしれない。

◆12月16日の夕方、ようやく日本から冬ものの荷物が届いた。もしかしたらという直感が働き、この日は近くの bar で latte macchiato を一杯だけ頼んだだけで、すぐに帰宅していたのだ。でも配達人が門のベルを押し、こちらは室内の受話器で応答するのだが、そのあと、どのボタンを押したら門扉が開き、建物の玄関ドアが開くのか、皆目分からない。しかも大家さんのいない時に、直観通り配達人が来たのだ。最終手段として、窓から顔を出し、直接口頭で私宛てか確認した。そこで支払いが 24.07€。日本から送る時にも料金がかかり、受け取る時にも料金がかかるなんて、現地で必要なものを購入するか、日本から郵送してもらうか、送料と受け取り料金を考えたら現地購入の方が安上がりになる可能性も多分にある。今回は、送ってもらった方がほんの少しだが安くついたようだ。で、25€渡してお釣りはチップ代わりにした。配達人は日本人の所に行ったことがあるのか、チップをもらおうとご機嫌な顔をして「コンバンハ」と言って車で走り去った。日本語の使い方を訂正する時間も気もない。とにかく、待ちに待った冬ものだ。これでこの冬を乗り切らなければ。



お寿司が食べたいと言っていたら、荷物に同封されてきた「さんた寿司」のクリスマス・カード。帰国したら絶対にすし屋に行くぞ!と決心しました。

このカードの裏には、ちびっ子からのメッセージが…「イタリアでなにをしているの?」…核心を突く質問です。なんて応えたらよいのだろう…

◆外に出た途端、雨が降ってきた。晴天なのに雨が降っている。しかも私の上だけに。上を見あげると、二階の住人がバルコニーの外に洗濯したばかりの大きなシーツを干していたのだ。しかも脱水もせずにそのままである。本人たちは良いであろうが、下を通る者にとっては迷惑千万な話だ。しかし、周りを見るとどこの家も、冬の晴れ間を争うように洗濯物を干している。そこでふと、バルコニーの外にどうしたらあのような大きなものを干すことができるのか、疑問に思っ、後日そっと覗いてみた。



バルコニーには、写真のような伸縮自在の物干しが設置されており、使うときだけ外に伸ばすのだそうだ。一階にある私の住居には、このようなものは設置されていないが、二階以上だとみな設置されている。しかし、上の階の水滴が下の階の洗濯物に降り注がれるわけだから、それほど良いものとは思えない。しかし、これがこの国の方式なのだろう。

◆また雪である。天気予報だと最低気温が－13度。日本では経験した事のない寒さだ。ちょっと雪が降り始めたな、と思って就寝し、翌朝窓を開けてびっくり。ちょっとしたスキー場くらいは積雪がありそうだ（と云っても、私はスキーはしません。寒いのは嫌いですから）。



そこで、自分が時々「犬系」になるのかと思うのだが、このような積雪の中をコピーをするためにわざわざ街まで出ることにしたのだ。で、予想通り、歩けない。積雪で歩けないのではなく、滑ってうまく歩けないのだ。履いていた靴は、こちらの初夏に購入した運動靴。寒さ、冷たさが靴の外から足の指先やかかとにまで浸みこんでくる。

それで街(in centro)に行ったのは良いが、ポルティコはつるつるの石床である。当然のことながら、雪の上よりも滑りやすく、この数十年間で初めて、とうとうバランスを崩して右ひざをつ

いてしまった。特に打ち身やけがはないが、かなりショックを受けた。そこで、その足で靴屋さんへ飛び込んで冬用の靴を購入せざるを得なかった。



確かめもせずに飛び込んだ先が、Clarks 専門店である。Clarks は、夏用のサンダルを購入したので 2 回目になるが、有名店なのか何なのか全く知らなかった。で、インターネットで調べたら、「クラークスは、1825 年にサイラスとジェームスというクラーク兄弟によって設立されました。創業の地はイングランド南西部の小さな町、ストリート。現在もクラークスが本社を置き、近くには以前使われていた刻印ロゴマークの塔があります。以来 180 年程の歴史を経て、カジュアルシューズの原点とされる世界的ブランドに成長しました。」(クラークス・ジャパンのホームページから抜粋)とのこと。だから夏のサンダルを購入したときも、店のおじさんが「Clarks だよ!」ってちょっと自慢げに言っていたのか。今回のお店も、店員の女性たちがみな同一の制服で身を包んでいた。老舗を強調しているのかな。

私が雪に耐えられる冬用の靴がほしいとイタリア語で云ったところ、おそらく意味が通じているのだろう、それに合う靴を 3 種類持ってきて、英語で説明してくれた。とても暖かいそうだ。私が値段やほかの色はないのかとイタリア語で聞いても、的確な答えが英語で返ってくる。どうしてイタリア語で話してくれないのか、不得手なイタリア語を駆使している最中に、英語の回答を理解し、またイタリア語で話さなければならないという、私にとってはとてつもない重労働を課されてしまった。伊英語の両方が堪能ならば、特に苦勞しないのだろうが、語学が苦手なものにとっては頭がはち切れそうである。その疲れを近くの bar で espresso を飲んで癒し、帰宅した。もちろん店中で新しい靴に履き替えて、最初の足跡をボローニャの積雪に刻んだのである。写真の靴は 169€。こちらの相場なのだろう。

◆もう日本の勤め先から、来年度のシラバスだの授業時間割だのと様々な連絡が入るようになってきた。もう事務処理上は来年度なのかな。しかし、いくつシラバスを書けば良いのだろう。これも大学の生き残りのためには避けて通れないことなのだろうか。

さらに日本の家族から、諸々の値上がりの情報が入ってきた。我が家は決して貧しいとは言えないのだが、それにしても税金と出費が非常に大きくなるのしかかってくる。帰国したら、どこか非常勤の口でも見つけないと、干上がりそうだ。でもすぐには見つからないだろう。そんなに甘い世界ではないのだから。通勤時間なども考えると、どこでもよいというわけにはいかない。ということは来年度一年間は節約の年になりそうだ。何から節約しようか、と今から考えている。いやいや、これは研究室に閉じこもって真面目に勉強しろ!ということか。(続く)